

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 101 号

平成 22 年 9 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

<http://encounter.agape.gr.jp/>

相沢良一

「黒潮の神学 上巻」(黒潮社)より(4)

親子三代の書

社会党の河上民雄先生よりいただいた『河上丈太郎演説集』の中に「親子三代の書」と題する河上丈太郎先生の一文がおさめられている。

「私が聖書を読み始めたのは、子供の時からなのです。私が4,5歳の頃であったと思いますが、日清戦争が始まったか、あるいはその前後ではなかったかと思えます。私の父の知人に金子という人がおり、近所に住んでおりましたが、その方が事業に失敗してキリスト教に入信しました。その後におけるその方の態度なり、生活なりが非常に変わって、立派になったことを、私の父は驚異の眼をもって眺めておりました。そしてそれに感心をし、金子さんの奨めに従って父はキリスト教になったのでした。父はキリスト教になって以来、毎晩聖書を一章ずつ読んでおりました。それが父の習慣になって、昭和6年80歳近くで亡くなったのですが、一生涯その習慣を続けておりました。子供の時に父から聖書を読むように言われ、父の前で

毎晩聖書を読んだことがあります。父は黙ってそれを聞いておりました。

当時、私どもの読んだ古い旧新約聖書は、関東大震災の時焼けてなくなりましたので、その後更めて入手した聖書が私の手元にあります。私は父の読んだこの聖書を見る度毎に、父は無学ではありましたが、聖書に取り組んだ態度といい、その精神といい、立派なものであったと今でも厳粛な思いがするのです。

私が第一高等学校に入学したのは、明治41年の秋のことです。当時第一高等学校の生徒は全部寄宿舎に入らなければならなくなっていました。私は東京に家があったので、通学しても差し支えなかったのですけれども寄宿舎に入りました。...

大学を出てから私は神戸の関西学院の教師となりました。関西学院もご承知のとおりにヤソ教の学校であって、従って聖書との関係は離れませんでした。

当時私は聖書の社会的方面の研究を、いささかやりました。そうしてその後政治に入りましてからも、私は聖書を読みつづけました。私は小型の英語の新約聖書を絶えず自分のポケットに入れていて、議会にも行きましたし、全国の遊説にも出かけました。暇ある毎にそれを読みつづけました。悲しい時には慰められ、苦しい時には救いを求め、嬉しい時には反省を与えられて来たのであります。

70年近い私の一生を通じて、聖書と離れることが出来なかったことを、いま私は幸いだと思っています。私は死に至るまでこの書物と離れることが出来ないのではないかと思います。否、私のみではなく、父もこれを愛しました。そして私の子もまたこの書物によって慰められるであろうと思っています。」(昭和33年10月10日)

10月中旬は信徒伝道週間にあたる。伝道の秋、われらは何をなすべきであるか。今は亡き河上丈太郎先生のこの一文は、それに対する回答ではないであろうか。 (89・10)

喜びの声挙げよかし

「聖書唱歌」が世に出て2年たった。最近は、カトリック教会の方々もよく使っていただき、既に9万冊が刊行された。

我が「聖書唱歌」が生まれた背景には「鉄道唱歌」があった…。
「鉄道唱歌」66節をスラスラ口ずさむことができるようになってみて、旧新約聖書66巻をこの「鉄道唱歌」の曲で読み込んでみようと思いついたのが吉日、善は急げと、その日のうちにほとんど夜を徹して、旧約聖書はなんとかまとまり、新約聖書の方は2日ほどかかった。そのあと推敲を重ね、押したり引いたりしながら、わが「黒潮」を印刷して下さる『栄光』の森さんをお願いして、6月6日、初版3万冊が発刊の運びとなったのである。…

「イスラエルよ聞け、われわれの神、主は唯一の主である。あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならぬ。きょう、わたしがあなたに命じるこれ等の言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に坐している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。また、あなたはこれをあなたの手につけてしるしとし、あなたの目の間に置いて覚えとし、またあなたの家の入口の柱と、あなたの門とに書きしるさなければならない」(申命記6・4-9) …

この「聖書唱歌」をうたっていたただくためにも、「聖書講座」第1巻におさめられている熊野義孝先生の「聖書論」という一文が参考になる。

「いっぱんにキリスト者の日常生活でどういう工合いにわれわれは聖書を学んでいったらよろしいか、それについてわたしはなによりも、聖書をくりかえし読み通すこと。昔風に言えば「聖書の素読」が大切であると思う。それには声を出して読むことも適切である。そして聖書を読むと祈りが引きだされてくるから 読み・祈り また 祈り・読む ことが平常化してくる。…」

老化の克服

柿の木坂教会に所属しておられ、一昨年9月、百一歳で召天された大沢はる老姉がつくられた「老人十戒数えうた」の絵入りプリントを、東大和にお住まいの平野鉄太郎先生より送っていただいた。

大沢はる老姉は、控え目でいつもニコニコしておられ、信仰的にも人間的にもご立派で、一男六女に恵まれ、お子さん方も、配偶者の方々もみなクリスチャンという理想的な家庭を築かれ、お子さん方はみなよく、孝養をつくされたとのことであった。

敬老の日にちなみ、この「老人10戒かぞえうた」を紹介させていただく。

- (1) ひとつ「人となかよく付き合っ、いつもニコニコすこやかに」。
- (2) ふたつ「不平不満を言わないように、感謝の気持ちを忘れずに」。
- (3) みっつ「身なりはいつもこぎれいに、心ゆたかに老後をすごせ」。
- (4) よっつ「余計なことはしゃべらぬように、ついひとことがにくまれる」。
- (5) いつつ「いつも車に気をつけて、健康管理を忘れずに」
- (6) むっつ「無理をいうまい又無理するな、時代の流れをよく見て暮せ」。
- (7) ななつ「泣くな、投げるな、いじけるな、長い年月だ、楽もある」。
- (8) やっつ「厄介者にならぬように、世話をかけるな、また世話やくな」。
- (9) ここのつ「心の持ちようで苦も苦にならぬ、楽しく過ごす健康のもと」。
- (10) とお「遠いようでもいつかは時が、悔いをのこさず静かに眠れ」。

いまは亡き大沢はる老姉を偲んで、「老人十戒数えうた」にふさわしいと思われるみことばを補足しておく。

- (1)「すべての人に寛容でありなさい」(第1テサロニケ5・14)
- (2)「すべてのことをつぶやかず、疑わないでしなさい」(ピリピ書2・14)
- (3)「あなたがたは主イエス・キリストを着なさい」(ロマ書13・14)
- (4)「いつも塩で味つけられた、やさしい言葉を使いなさい」(コロサイ書4・6)
- (5)「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。」(第1コリント6・19)
- (6)「今の時を生かして用いなさい」(エペソ書5・16)
- (7)「愛はすべてを偲び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」(第1コリント13・7)
- (8)「互いに愛し合うことのほかは、何人にも借りがあってはならない」(ロマ書13・8)
- (9)「わたしを強くしてくださる方によって、何事でもすることができる」(ピリピ書4・13)
- (10)「主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない者にしてくださるであらう」(第1コリント1・8)

この7月、聖路加看護大学学長の日野原重明先生を大島にお迎えした。2回にわたり、二百人以上の方々が教会に見えてくださった。

先生に「老いを創める」という言葉がある。要するに「60の手習い」「70の手習い」を意味する。まさに、「老いを創める」ことさえ忘れなければ、老いもまた楽しからずや、である。

徳川末期の儒者佐藤一斎の「言志四録」のうちの「晩録」60に「少にして学ばば、すなわち壮にして為すことあり。壮にして学ばば、即ち老いて衰えず。老いて学ばば、即ち死して朽ちず」とある。

老いて学ぶに最も格好なるは聖書である。旧新約聖書一巻あれば、老いて学ぶにことは欠かないであろう。 (91・9)

からしだね一粒から

星野達雄氏著「からし種一粒から 星野るいとその一族」から。
(星野るいは、)1884年3月、住吉教会(今の横浜指路教会)で、稲垣信
牧師からの受洗である。以下、ここからが本書のクライマックスで
ある。

「堀牧師は声を大にして「伝道のために働くのです。あなたは夫を
天に送って、妻としての役目は果たした。そして8人の子供は皆成
人した。今こそ残る生涯を全くキリストの福音伝道のために捧ぐべ
きである」と激励された。堀牧師のこの言葉は、青天のへきれきの
如く彼女の魂を貫いた。彼女は、ハッと目覚めたる如くに「そうだ、
この生命を伝道に捧げよう。そこにのみ生甲斐がある」と悟るや、
彼女の靈性は、勃然として、にわかに湧き上るのを覚えた。そこで
るいの考えたことは、「人に伝道するには聖書をよく知らねばならな
い」と、聖書を心こめて読むこと、聖書の研究に取りかかることが
先決であることだと悟った。…」

伊豆の伊東にいる家内の母は、この7月で満97歳になった。家内
の父は80歳で米国に召されて20年になる。このふたりは、文字ど
おり主イエス・キリストのために生まれてきたような人物であった。
その伊東の家には、息子夫婦、孫夫婦3世帯が同居。4人の曾孫、全
家族あげて近くの教会に通い、忠実な教会生活を送っている。日本
伝道で問われているのは、信仰の継承ではないだろうか。このよう
な信仰の継承に関する実例が、この「からし種一粒から」であった
のである。

まさに「おばあさん、働きなさい。伝道のために働くのです。あ
なたは夫を天に送って、妻としての勤めを果たした。そして子供も
みな成人した。今こそ残る生涯を全くキリストの福音伝道のために
捧ぐべきである」。ここにこそ、真実なる加齢の恵みが存するという
べきではないのか。… (95・8)

一燈を提げて暗夜を行く

「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂ふること勿れ。只々、一燈を頼め。」これは幕末の儒者佐藤一斎（1772-1859）の『言志晩録』に出てくる言葉です。

わたしがこの50年間、ただひたすらに宣べ伝え、語りつづけて来たのは、十字架の主イエス・キリストの出来事でした。わたしにとっての一燈とは、まさしく「わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子」(ガラテヤ書2ノ20)なる主イエス・キリストであったのであります。...(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの「福音書」)の後に続く、ことに使徒パウロの「手紙」は、ではなぜ、主イエスは十字架につけられたのか、その十字架の出来事の宗教的な解明、さらには、神学的な解釈であったのでした。その使徒パウロの信仰が、のちの教会の、いま、わたしたちの信仰の指針となっておるのであります。

「十字架の言は、滅びゆく者には愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である」(第1コリント1の18)

わたしは、説教とは、使徒パウロのこのことばの解明に外ならないと考えているのであります。救いとはいったい何からの救いであるのでしょうか。...わたしたち人間に死をもたらしたこの「罪」を許すために、このわたしの罪の身代わりとなって、神のみ子、主イエス・キリストが十字架につけられたのであります。この福音の説き明かしが聖書であったのであります。

「罪の支払う報酬は死である。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」とは、死の暗夜に直面しているわたしたちにとって唯一の慰めであります。

わたしたちが手にする事の出来たこの一燈は、わたしたちの、いわゆる難行苦行、修養努力、善行功德によって獲ち得た一燈ではなくして、じつに、十字架の主イエス・キリストを信じる信仰によって、神から与えられた恵みの賜物であったのであります。

第三講 キリスト論

「汝らは我を誰と謂うか」(1)

「人は我を誰と謂うか」、弟子達曰く「バプテスマのヨハネ、エリヤ、預言者の一人」と。かくの如くイエスを単なる宗教的天才と見ることは、極めて近代人に親しみ深い。世人はイエスを釈迦、孔子、ソクラテスと並べて、世界四大聖人の一人と認めるにはいささかのちゅうちょも感じないのである。

然し単にこれにて尽きるであろうか。「汝らは我を誰と謂うか」。此処に信仰の決断がある。あれか、これかである。我等はイエスを世の人のごとく、宗教的天才、聖人君子の一人とのみ認むるだけであってはならぬ。これは我等の生死を扼する告白である。イエスを我らの側に置くか、神の側に置くか。此処に信仰の決断が存する。

...

「汝はキリスト活ける神の子なり」この信仰に基督教は立つ。教会に於いて、イエスをキリスト即ち神の言、啓示と認めざるもの、これこそ何ものにもまして福音の真理を危くする者である。トルストイ流の基督教を思え。弟子たちがイエスをキリスト、活ける神の子なりと告白し得たのは、単にイエスの教訓によるのではなくして、実に彼の無比なる人格に触れたがためであった。

ヘルマン曰く「救われんがためにキリストの神性を信ずる必要はない、ただ救われた者のみがキリストを神として礼拝するのである」。

...

「言は肉体となりてわれらの中に宿り給へり。我等その栄光を見たり。実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり」(ヨハネ伝1の14)。

神の言が肉体となり給うた。これがインカーネーションである。このインカーネーションの神学こそ、救われた者の神学である。これを要するに、基督論とは、結局キリストの神性に関する教理である。

「汝らは我を誰と謂うか」(2)

荒野におけるバプテスマのヨハネが叫んだ「視よ、これぞ世の罪を除く羔羊」(ヨハネ伝1の29)なる言にキリストの全運命は決定せられている。この神の羔羊の意義を把握いたすためには、まず何よりも罪とは何であるか、即ち罪悪感が徹底的に理解されなければならない。...

神は人間をキリストの十字架に於て罰し給うたのである。この神の恐る可き審判こそ即ち驚くべき神の愛に外ならないのである。神は人間の罪をキリストの十字架に於て罰し給う事に依り、人間に和解の聖手を伸べ給うたのである。贖罪とはかかる罪人なる人間に対する和解の行為である。この行為こそ福音の内容に外ならなかったのである。

「即ち神は忍耐をもって過来しかたの罪を見遁し給ひしが、己の義を顕さんとして、キリストを立て、その血によりて信仰によれる宥の供物となし給へり」(ロマ書3ノ25)

「然れど我等がなほ罪人たりし時、キリスト我等のために死に給ひしに由りて、神は我らに対する愛をあらはし給へり」(ロマ書5ノ8)

「これらの事はみな神より出づ、神はキリストによりて我らを己と和がしめ、かつ和がしむる職を我等に授け給へり。即ち神はキリストに在りて世を己と和がしめ、その罪を之に負はせず、かつ和がしむる言を我らに委ね給へり」(コリント後書5ノ18-19)

「愛といふは、我ら神を愛せしにあらざり、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥の供物となし給ひし是なり」(ヨハネ第1書4ノ10)...

斯くて、イエス・キリストこそ神が我々人類に贈り給うた神の羔羊であり、此のイエス・キリスト、殊にその人格と行為の頂点たる十字架に於て、神が我々人間と和ぎ給うた。キリストの人格と業とは、此事の啓示であったのである。...

海上歩行の奇跡

イエスは夜明けの4時ころ、海の上を歩いて彼らの方へ行かれた。弟子たちは、イエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと言っておじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた。(マタイ伝 14・25 - 26)

このような主イエスの海上歩行の奇跡物語をどのように解釈し、どのように理解したらよいのか。

この物語を記録した福音書記者の意図は、読者をして、主イエスこそ自然をも支配される神のみ子でいましたもうとの信仰を、告白させるためであったのである。風と波にもてあそばれている小舟は、この福音書が記された当時の教会の姿の反映である。教会はこの世にあって、いま、まさに、この世に呑みつくされるような状態のなかに置かれていた。そこにもたらされたのは、実に「我らの主は甦り給うた」という喜ばしき主の復活のおとずれであった。しかし、主イエス・キリストの復活のおとずれは、信仰なくしては、受けとめることのできない超自然的な出来事であったのである。

海上歩行のイエスを見て、幽霊だと叫び声をあげたのは、その当時の教会にとって、主の復活はまだ幻影としか映じていなかったのではないか。しかし、それは決して幻想でもなければ、単なる宗教的観念でもなかった。教会は迫害と苦難の中から「わたした、恐れることはない」との復活の主イエスのみ声を聞くことができるようにされたのである。じつに、主イエスの復活なくしては、教会は存在し得なかったし、また弟子たちは、復活の主イエスキリストを目指さずしては、殉教という死の海を歩くことができなかつたのである。

今日の教会にとっても、事態は同じではないか。教会におけるかかるキリストの体験は、決して単なる幻影でもなければ、勝手な想像でもない。「わたした、恐れることはない」との主イエスのみ声を聞くことによつてのみ、教会は嵐の中にも立つことができるのである。